

今朝の礼拝は、高齢者祝福礼拝と銘打ってささげる礼拝となります。聖書が伝える人間の命についての基本的な教え、それは、人間は神によって土から造られ、その鼻に主なる神が命の息を吹き込むことによって、人は生きる者とされたということです。人間は神の息を吹き込まれた生命体であり、神から頂いたその命ある体をもって人生を歩み、その生涯のあいだ、作り手である神がその人生を持ち運ばれるのです。神が息を吹き込まれたからと言って、ギリシャ人が考えたように、人間のうちに永遠の靈魂が宿るわけではありません。旧約聖書で「霊」と訳されるもとのヘブライ語は「ネフェシュ」といいます。この「ネフェシュ」は、私たちが地上の生涯を終え、いわゆる「息を引き取る」時に、与え手である神のもとに帰ります。旧約聖書のコヘレト書 12 章 7 節に「塵はもとの大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」とみ言葉にある通りです。このように、人間は神によって造られたものであり、神ではありません。よって、あらゆる被造物と同様に人間も有限なものであり、死へと運命づけられたものです。それゆえ、人間にとって死ぬことは驚くべきことではなく、むしろ自然なことです。しかし、そのような死の中にも「よい死」があると聖書は考えます。それはアブラハムのように「老人となり、年が満ちて」死ぬことです。一方で、それとは反対に悪い死があることを、聖書は記しています。それは人間が不幸のうちに死ぬこと、または若死にすることです。良き死は祝福であり、悪しき死は審きであります。（イザヤ書 53:8）。

しかし、このように申し上げると、そもそも人間の死において、よい死と悪い死があると聖書が説いていることに反発（あるいは抵抗）を覚える方もいらっしゃるでしょう。たとえば、病気や事故で人が若くして亡くなった場合、その死は悪い死であったと、軽々に言うことはできないではないかという主張です。私もその意見はもっともだと思います。しかし、もう少し踏み込んで考えると、そもそも旧約聖書が書かれた時代は、今から 2500 年以上も昔のパレスチナ周辺地区です。現代のような科学技術（医学を含む）も哲学も思想もない古代、しかも辺り一面大部分が砂漠というきびしい自然環境の中でイスラエルの民は生きてきたのです。人々は生きるのに精一杯で、よい生き方とか悪い生き方とか言っていられなかった。創世記を読みますと、アブラハム、イサク、ヤコブといった信仰の父祖たちは、ある意味で食べるために生きた人たちでした。羊たちに飲ませる水をめぐって争い、井戸をめぐって戦った人たちです。そのような厳しい環境の中で、ヤコブに 12 人の子供たちが与えられたことは、神の民イスラエルにとって願ってもない祝福の事柄でした。産めよ、増えよ、地に満ちよ、とは天地創造の途中で主なる神が語られた言葉ですが、その言葉通りイスラエルの民の数が増えること、それが主なる神が何よりも望まれることだったのです。主の民に多くの命が与えられていること、それがそのまま恵みだったのです。そのような意味で、私はこの世に生を受けた現代の私たちにとっても、長寿であることは幸いだたと、素直に喜んでよいのではないかと思うのです。

先週の月曜日のことですが、午後、東ブロックの牧師会が、千葉教会で開催されました。市原市にあるこの教会まで、電車を使ってほぼ 2 時間かかりました。あの日はとても暑く、駅から千葉教会までの道を歩く途中で汗が噴き出してきました。その汗をハンカチで拭きながら 15 分近く教会までの道を歩きました。ある牧師の説教批評を終えたあと、それぞれの教会の近況報告を行う時間が持たれたのですが、私はそこで、8 月までの当教会の諸行事を紹介したあと、今度の 9 月 2 週に教会で高齢者祝福礼拝をささげる予定であること、その対象者を 85 歳以上の方としたことを、報告しました。するとメンバーの一人の牧師が 85 歳はめずらしい、少し年来が高過ぎはしませんか、というのです。その教会では自分が高齢者だと思う人で、礼拝で祈ってほしいと思う人は年齢に関係なく前にでてよい、ということにしているという。すると結構な人数が前に出るというのです。ユニークな教会だなと思いました。その意味で、先ほどの祝福式で私のささげた祈りは、実年齢に関係なく、結構な数の人に当てはまる祈りであるかもしれません。

そこで、本日の聖書に入ります。イザヤ書 46 章は、バビロン捕囚の末期に活動した第二イザヤと呼ばれる無名の預言者が、イスラエルの民が捕囚から解放される日が近づいているということを、幻、あるいは希望の出来事として語り継いだところです。1 節にある「ベル」あるいは「ネボ」は、バビロンの主だった偶像の神の名前です。（ちなみに、ネブカドネザル王の「ネブ」はこのネボから取ったものです）これらの像は、金属で造られた巨大な像でした。これらの偶像は、平時には、祭の際に荷車の上に置かれ、動物の背に乗せられて町の中を行進したと言われます。しかし、本日の箇所が描く場面は、華やかなお祭りの光景ではありません。そうではなく、ここでは、ペルシャとの戦いに敗れ、敗走するバビロン軍が、自分たちの神であるベルやネボの偶像を、動物たちに背負わせて逃げてゆくようすが描かれています。もしも、その途中で捕らえられてしまうと、これらの偶像は戦利品として敵に持ち去られてしまいます。古代オリエントでは、戦争は神と神との戦いでした。戦争に負けることは、自分たちの神が敗れたことを意味します。そこで、バビロン王は、神の像が敵兵に奪われる

ことがないように、動物たちに背負わせながら逃げたのであります。しかし、その重さに耐えかねて、家畜たちが倒れると同時に、これらの神像もかがみ込み、倒れ伏したと書かれます。バビロンの神々は、この危機に際して国家を救うことができないばかりか、自分の力で動くことも出来ず、疲れ弱っている動物たち、あるいは兵士たちの重荷となっているのです。

しかし、それに対して、イスラエルの神はご自分の民を生まれ出た時から白髪になるまで背負い、持ち運ばれる神であるとイザヤは言います。イスラエルが苦しんでいる時、弱った時も、決してその手を離すことなく、イスラエルを持ち運んでくださるのです。弱りはてている民の重荷となるのではなく、逆に神が弱っている民を持ち運ぶのです。神は偶像の神、背負われる神ではなく、逆に民を背負う神であることが、イザヤによって高らかに宣言されます。人間の重荷を背負ってくださる神こそ、本当の神ではないでしょうか。さらに、このあとの5節以下で、イザヤは皮肉を込めて語ります。袋の中の金や銀を支払い、鋳物師をやとっていくら高価な神を鋳造したとしても、人間が運んでそこに安置しなければ、偶像の神は自分では何一つできない。7節にあるように、それらは「動かない」、「答えない」、「救わない」3つの否定形で表現される神です。偶像の神には生命がない、力がないとイザヤは言うのです。

ここで、先ほど歌った賛美歌 520 番 1 節の歌詞を、もう一度味わいたいのです。「人生の海のあらしに 揉まれしこの身も、ふしぎな神の手により 命びろいしぬ いと静けき港に着き、われはいま安らう 救い主イエスの手にある 実はいともやすし」何十年という人生の歩みを重ねる中で、あのとき神の助けがなければ、自分は滅んでいた。今の自分は到底なかったと、思うことがあるものです。私にも何度かそういう体験がありました。そのときはまだ若くて、自分の力で何とかかなると思いががっていた。しかし、振り返ってみると神の支えがあったからこそ、奈落の底に落ちることもなく、今日までの日々を守られてきたと、しみじみ思われるのであります。旧約聖書に登場する信仰の父祖たちの歩みを見てみますと、みな相当に年老いてから亡くなっています。アブラハムは 175 歳、イサクは 184 歳、ヤコブは 147 歳です。みな、平均年齢以上の年齢で召されています。創世記の著者は、シンプルに、長寿であることを神の祝福の結果であると考えていたようです。

私自身のことを申しあげて恐縮ですが、60 歳になったとき「自分はよくここまで生きて来られたものだ」と正直に思いました。幼い時から病気がちで、高熱を出して倒れることもしばしばでした。大学に入学した時に、大学病院で健康診断があり、その結果、若年性高血圧症だと言われて、入学後も定期的に血圧測定に呼びだされました。でも、さっぱり良くならない。ところが、その高血圧症が、結婚後、家内の薄味の料理によって治ったのです。見えざる神の手が働いたのかもしれない。あと何年生かされるか分かりませんが、命は神さまから預かったものであるということを痛感しています。良き管理者として、その命を大事にしたいと思わされます。

最後に、一冊の本を紹介して本日の説教を終えたいと思います。聖路加病院の院長をされていた日野原重明先生の「老いを創める」という本です。何かを創めることに喜びを見いだせる者は、たとえ年齢が高くとも、いつまでも若々しいと、日野原先生はこの本の中で書いています。そういう日野原先生も 106 歳でお亡くなりになりましたが、その手帳には 2、3 年先の予定が書きこまれていたそうです。幾つになっても、目標を持って生きておられた。この本の中で、人間の死に対するある病院の興味深い研究の結果が紹介されています。今から 100 年以上の前のアメリカのジョンス・ホプキンス大学の大学病院で、そこに入院した 500 名の死を間近に控えた患者（＝臨死患者）の死の感じ方についての研究結果です。それによると、500 人のうち 18% が肉体的に苦しんだものの、死を恐れて悩んだ者はわずか 2%（10 人程度）にしか過ぎなかったというのです。この結果について、この研究をしたウィリアム・オスラー教授は次のように述べています。「われわれには、死は恐怖の主である。死は恐ろしいものである。しかし、死という行為が苦痛に満ちたものとして起こることは、何と少ないことか。…死は容赦なく人間を捕まえに来るのだが、大部分の人間にとって、それは慈悲深くおこなわれることになるのであり、死は誕生と同様に眠りであり、忘却にすぎないのだ」死はこわくない。たとえ、それが私どもを捕らえる時にも、その大部分は慈悲深く行われるのだ、というオスラー教授の教授の発言は、私どもが心に刻みたい言葉です。ところが、今日の病院で亡くなる患者さんは、苦しんで死んでいく人が余りにも多い。それは、近代医療の延命治療の副産物ではないか、と日野原先生は述べています。生まれた時と同じように、その人が安らかに召されるように、主治医は努力すべきだという。その通りだと思います。死もまた、われわれには慈悲深くおこなわれるのです。私たちは、死を恐れてはなりません。いや、むしろ神が命を取りたもうその日まで、与えられた命を輝かせ、「年を取って何の楽しみもない」などと言わずに、輝いて生きるのです。命を持ち運ばれる神に全権を委ねつつ、信仰によって日々新たにされ、目標のある人生を歩みたいと思います。

お祈りいたします